

# アルフレート・シュッツの社会科学の基礎づけにおける生世界概念の導入の契機と意義

——生成から世界への内属へ——

高 艸 賢\*

アルフレート・シュッツの生世界論は、社会学の研究対象領域の1つを提示しているだけでなく、社会科学の意味を反省するための手がかりを与えている。本稿の問いは、シュッツにおいて生世界概念は何を契機として導入され、その結果彼の論理はどのように変わったのか、という点にある。その際、シュッツの社会科学の基礎づけのプロジェクトに含まれる2つの問題平面を区別し、社会学者もまた生を営む人間（科学する生）だという点に注目する。

1920年代から30年代初頭にかけての著作において、シュッツは生の哲学の着想に依拠しつつ、生成としての生を一方の極とし論理と概念を用いる科学を他方の極とする「両極対立」のモデルを採用していた。しかし体験の流れとの差分において科学を規定するという方法には、科学する生を積極的に特徴づけられないという困難があった。こうした状況でシュッツは生という概念の規定を見直し、生世界概念を導入したと解釈される。

生世界概念の導入によって、日常を生きる人間も科学に従事する人間も、世界に内属する生として捉え直された。私を超越し一切の活動の普遍的基盤をなす世界の中で、生は間主観性・歴史性・パースペクティヴ性を伴う。この観点からシュッツは科学する生を、科学の間主観的構造、科学的状況と科学の媒体としてのシンボルの歴史的成立、レリヴァンス構造による科学的探究のパースペクティヴ性という3点によって特徴づけた。

キーワード：アルフレート・シュッツ、社会科学の基礎づけ、科学する生

## 1 問題の所在——シュッツにおける生世界概念の導入

社会学者はしばしば、論理的かつ合理的な科学を生と対立的に扱うことで、生という独特の領域——曖昧で複雑な主観的意味付与の領域——を確保しようとする。生世界（Lebenswelt）<sup>1)</sup>という概念は、そうした領域を主題化しようとする社会学の標語として用いられることがある。生世界概念を社会学に浸透させた立役者の1人が、アルフレート・シュッツ（1899-1959）である。シュッツの理論を手引きと

\* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程 nm7.tk.shogi@gmail.com

して、社会学の研究对象領域の1つとしての生世界が発見された。常識的知識のレベルにおける合理性、自明性とそれが問題視される状況、間接呈示とシンボルなどに関して、彼の生世界の現象学的記述を基礎として多くの社会学的研究が生み出されてきた。

だがシュッツの生世界論の重要性は、個別の研究对象領域を提示しているという点よりも、社会科学という営みの意味自体を反省するための手がかりを与えているという点にある。元々、生世界という概念は、エトムント・フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（以下『危機』と表記）においてあらゆる学問の意味基底を指すものとして用いたものである（Husserl 1954=1995）。後述するように、シュッツは社会科学の意味を反省的に解明する研究プロジェクトを「社会科学の基礎づけ」と呼び、終生自らの課題として取り組んだ。

ところで、シュッツが生世界という表題を探究の初めから掲げていたわけではないということは、それほど広く認知されていない。シュッツの知的遍歴としては、彼自ら述べているように、当初アンリ・ベルクソンの生の哲学の影響を受け、のちにフッサール現象学の研究へと進んだ<sup>2)</sup> (Schütz 2009: 295-6)。とりわけ1920年代に書かれた草稿には、ベルクソンの概念をそのまま踏襲して組み立てられている部分が多くみられる。

してみると、シュッツにおいて「生世界」という概念はいつ出現したのだろうか。むしろ、シュッツの著作・草稿を検討すれば、1932年に上梓された『社会的世界の意味構築』（以下『意味構築』と表記）に生世界という言葉は登場しないこと、1937年に書かれた草稿の中で初めて生世界という言葉が登場すること（Schütz 2003: 139, 142, 155; 森 1995: 583）は、文献学的事実として突き止めることができる。問題は、シュッツにおいて生世界という概念は何を契機として出現したのか、そして生世界概念の導入の結果何が変わったのか、という点にある<sup>3)</sup>。

生世界概念の学問論的意義としてしばしば引き合いに出されるのは、この概念によって学問以前の生の領域が開示されるという点である。確かにフッサールの『危機』冒頭はそのような趣旨で書かれている。しかし、ことシュッツに関していえば、学問（科学）以前の生という問題は、彼が生世界概念の導入以前から、もつといえは現象学への接近よりも前から着手していた問題である。それでは、シュッツにとって生世界という概念は、1920年代から30年代初頭にかけて自らが展開した思考のパラフレーズにすぎないのだろうか。むしろ、シュッツはこの時期の自らの論理に何らかの困難を見出して生世界概念へと接近したのではなかろうか。仮にそうであれば、シュッツにおいては生世界概念の導入によって新たな理論的テーマ・論理構成が登場したのではないか<sup>4)</sup>。本稿はこの点の解明を試みる。

## 2 「社会科学の基礎づけ」における2つの問題平面

シュッツは自らの取り組むプロジェクトを「社会科学の哲学的基礎づけ」と呼ん

ている。シュッツの思考の展開の中でどのように生世界という主題が入り込んできたかは、このプロジェクトとの関係の下で探求されねばならない<sup>5)</sup>。ただし、このプロジェクトには区別すべき2つの問題平面がある。本節ではこの2つの問題平面を示しつつ、先行研究におけるシュッツ生世界論の扱いについて述べる。

第1の問題平面は、社会科学の対象としての社会的世界の構造を問うものである。社会科学の対象たる社会的世界は、社会科学に先立って存在している。「あらゆる社会科学には、固有の特徴をもつ素材が先行与件になっている」(Schütz 1932: 7 = 2006: 32) のである。社会科学の認識は、学的認識が概念を与えることによって初めて存在を認められるような対象を扱っているのではない。社会科学の対象たる社会的世界は、いわばはじめから「そこにある」のである。したがって、社会科学の認識を開始するのに先立って、人間たちの住まう世界がいかなる構造によって成り立っているかを問う必要がある。シュッツの基礎づけの試みが「社会学者たちが暗黙のうちに自明視してきた社会的世界そのものの構成を明らかにしようとした」(吉澤 2002: 2) と要約される場合、これを基礎づけと呼ぶのはこのような事情によるのである。

第1の問題平面において、生世界は間主観性の成立可能性を支えるものとして位置づけられる。浜日出夫が指摘するように、シュッツは他我構成の問題をめぐるフッサールの超越論的現象学と決別し、自然的態度の人間たちが「他我の一般定立」を遂行する生世界に記述の焦点を絞っている(浜 1982)。この問題平面においてとりわけ詳細にシュッツの思考の展開を追っているのが、イルヤ・スルバルである。スルバルによると、内世界的な社会性・間主観性の次元に焦点化されたシュッツの思考において問われているのは、「主観性が間主観性の基礎なのか、間主観性が主観性の基礎なのか」といった問題ではなく、「生世界の主観的-間主観的リアリティ」(Srubar 1988: 207) の産出機制である。つまり、シュッツの理論において生世界は、行為を通じて社会的現実が産出される場として扱われている。

しかし、シュッツの基礎づけの関心が生と科学の連関の論理を解明することにあるならば、考えるべきことはもう1つ存在する。それは、社会学者もまた生を営む人間だということである。社会科学もまた、科学に先立って存在する世界に含み込まれている。日常的行為者の記述に専心する第1の問題平面だけでは、たとえ社会科学の基礎概念の再検討に貢献したとしても、社会科学という営み自体の解明には至らない。科学に先立って存在する世界の論理を解明しつつ、その世界の内で行われる科学的探究にその論理を自己適用することで、ようやく社会科学という営みの反省的解明が可能になる。したがって、社会科学が生と地続きであるという事態、つまり「科学する生」という事態がどのように概念化されるのかが問題になる。これがシュッツの基礎づけ問題における第2の問題平面である。第2の問題平面は、第1の問題平面を経由することで初めて十全に主題化される。このことを視野に入れて初めて、シュッツ理論を社会科学の基礎づけというプロジェクトに沿って理解することができる。

この第2の問題平面に関して見た場合、生世界概念の導入の契機と意義はどのようなものになるのか。つまり、シュッツが科学する生を解明するにあたって、どのような困難に直面し、それを生世界概念によってどのように克服しようとしたのか。こうした問いは先行研究においては十分な答えが与えられていない。スルバルは2つの問題平面の連関を見抜いていたが（Srubar 1988: 276-9）、第2の問題平面を主題化してはいない。丸山高司（1987）は、シュッツを克服することで第2の問題平面に到り着くと考えているが、この考えはシュッツの可能性の過小評価である。また、那須壽（1997）の研究は、フッサールにおいて生世界という概念が科学を含みこむものとして規定される（包括性）と同時に、科学に先立って科学の地盤をなす領域としても規定されている（対照性）という二義性を指摘している。その上で、シュッツにおいても日常生活世界と科学の関係が同様に対照性と包括性という二義的性質を有することを指摘し、フッサールとシュッツでのこの問題に対するアプローチの違いを検討している（那須 1997: 55-75）。しかし那須は、フッサールとの偏差からシュッツの特徴を明らかにしようとするというアプローチによって必然的に、シュッツの思考の展開の中で生世界論の導入契機を探るという方向性を閉ざしてしまっている。

生世界概念の導入の契機と意義をシュッツの思考展開の中で探るには、生世界概念の導入以前に立ち戻る必要がある。そこで本稿は、1920年代および30年代初頭の著作・草稿から検討を始め、シュッツの思考の変遷を追う。

### 3 生の哲学からの離脱——両極対立の困難

本節では1920年代から30年代初頭にかけてのシュッツの著作を扱い、生世界概念の導入以前の彼の思考様式を示す。

まず検討すべきは、『意味構築』第3章に登場する「主観的意味と客観的意味の両極対立」という論理である<sup>6)</sup>。主観的意味の構成は、生成する体験の流れの中で一歩ずつ行われる。これに対し、生成し去った意味の層が客観的意味である。例えば、自転車に乗るという行為や文章を書くという行為は、生成する体験の流れの中で連続的に遂行されるものであるが、「 $2 \times 2 = 4$ 」という命題や「駅員」という類型はそうした体験の流れからは独立に成り立っている。これをシュッツは「両極対立（polare Gegensätzlichkeit）」とよぶのであるが、その含意は、「主観的意味の把握と純粋な客観的意味の把握の間には、著しい量の一連の中間段階がある」（Schütz 1932: 153=2006: 212）というところにある。

こうした考察に基づいて、シュッツの社会科学論が築かれる。すなわち、「科学はつねに客観的意味連関であり、社会的世界のすべての科学の主題は、主観的意味連関一般ないしは特定の主観的意味連関についての客観的意味連関を構成することにある」（Schütz 1932: 255=2006: 335）。したがって、社会科学の営為は、生成する体験の流れからの論理的な距離によって規定されている。

こうした見方は1920年代の草稿から引き継がれている。この草稿「生の形式と意味構造」(以下「生の形式」と表記)の中で、シュッツは「生の形式の二極」について論じている。シュッツの提示する表においては、一方の列に「純粹持続における私」「延長しないものの領域」「それ自体では無意味な、記号の誕生に先立つもの」が、他方の列には「概念的、論理的な私」「延長の領域」「意味体系の複雑な構築と純粹論理における意味体系の解明」が掲げられている(Schütz 2006: 81)。概念と論理を扱う科学の営みは、純粹持続(純粹な体験の流れ)と対極をなす生のありようとして位置づけられている。

生の領域を「持続の流れ」ないし「体験の流れ」として特徴づけ、これを概念や論理の領域に対置するというのは、生の哲学において多くみられる議論である。ヴィルヘルム・ディルタイやベルクソンといった哲学者に代表される世紀転換期の生の哲学は、生という原理によって哲学を組み直そうとする「非合理的なものの形而上学」ないし「価値中立的な意味での非合理主義」である(Schnädelbach 1983=2009: 199)。原理としての生(体験)を措定することで、概念を操作する思考(科学)の領域が生とどのような関係にあるのか、これを探求するのが生の哲学である。「生の形式」草稿に顕著なことであるが、シュッツはベルクソンの純粹持続と持続の記号化(言語化・概念化)との対を明示的に引き受けている(cf. Bergson [1889]1908: 97=2010: 124-5)。したがって、主観の意味と客観の意味の両極対立は、生の哲学における体験(流れゆく生そのもの)の次元と概念・認識・論理の次元との対立と重ね合わせて理解することができる。シュッツはこの問題に対する解答の提出方法まで生の哲学と同じ道を歩んでいたわけではないが、少なくとも「社会科学の基礎づけ」というプログラムの出発点にある洞察は生の哲学と共有していたといえる。

しかし、両極対立のモデルで社会科学を捉えようとするシュッツの試みは困難に直面している。先述の2つの問題平面に照らして考えると、シュッツの社会科学基礎論の行論は、第1の問題平面(日常的な生)を経由することで第2の問題平面(科学する生)へと至ろうとするものである。そしてこの時期のシュッツは「生成しつつ生成し去る体験の流れ」を第1の問題平面の主たる構成要素に据え、それと対照させる形で第2の問題平面での社会科学論へと展開する、という構えをとっている。しかし、体験の流れとの差分において科学を規定するという方法は、科学という営みを消極的に規定することはできても、積極的に規定することはできない。したがって、この論理構造では、「科学する生」を主題とする第2の問題平面での議論を十全に展開することはできないのである。

シュッツ自身はこの困難に明示的に言及しているわけではない。しかし、傍証となる事実はいくつか挙示することができる。第1に、シュッツは1932年以降の論文・草稿の中で「二極性」「両極対立」といった表現を用いていない。「生の形式」および『意味構築』の中で自らの社会科学基礎論のキーワードとなっていたこれらの表現を使用しなくなったという点は、シュッツの思考の構造に重大な変化があっ

たことを示唆している。第2に、そうした変化の一端は類型という概念の意義の拡張に表れている。『意味構築』において類型という概念は、生き生きした体験の同時性における「われわれ関係」から離脱した観察者が他者を把握する際に用いる枠組みとして位置づけられていた。これに対し、1932年以降の論文・草稿では類型は経験の地平をなすものとして位置づけられ、生きられた経験につねに内包される要素として扱われている。

両極対立のモデルの困難は、生の哲学から引き出された、生成としての生 (Leben) の概念そのものに由来している。そこでシュッツが次に着手することになった課題とは、この生という概念の規定を見直すことであった。「生世界」という概念は、そうした作業の途上で導入された概念である。

## 4 世界に内属する生

### 4.1 世界という概念

ベルクソン流の枠組みからの離陸を目指すシュッツは、「世界に内属する生」という考え方を採用する。フッサールが述べているように、世界とは、一切の認識活動に先行して普遍的基盤としてつねにすでに存在するとみなされているものである (Husserl [1939]1964=1999: 22)。世界は、生ける人間にとってそこから脱出することができないような特殊な媒体として機能している。したがって、世界は認識活動に先行するだけでなく、あらゆる活動・知覚・思惟に先行して存在している。その意味で世界は私を超越するものである。こうした媒体は、生の深層のダイナミズムに傾注するベルクソンの概念枠組みからは導出されない<sup>7)</sup>。

生世界概念を初めて用いた1937年の草稿において、シュッツは人々の「世界における (への) 方向づけ (Weltorientierung)」という表現を用いている (Schütz 2003: 113)。また別の草稿において、シュッツは次のように述べている。

私は意識生のいかなる瞬間にあっても、世界の内に自分自身を見出す。私に現われているがままの世界の内に在る私の位置——時間的、空間的、自然的な位置、そして後に論じられるような他の人々のあいだにいる人間としての位置——は、私が、世界の内に在る自分の状況と呼んでいるものである。したがって私は、フランスの実存主義者たち [=主にサルトルとメルロ＝ポンティのこと：引用者注] が好んでそう表現するように、つねに「状況の内」に在る。(Schütz 1970: 167=1996: 233)

ここでシュッツが語っているのは、「世界への内属」という事態である。生ける「私」は時間的・空間的・社会的な状況の中におかれた人間であり、その状況の中でものごとを解釈し行為する。世界への内属が語られるようになると、「生成しつつ生成し去る体験の流れ」の次元は背景に退く。こうした次元は哲学的な深層の間

題として回避され (Schütz 2003: 119), 世界内の生は第一義的には「自然的世界態度」として記述される。

世界内の諸対象は、色・形・大きさ・重さといった点から記述されるだけでなく、道具・本・芸術品といった人間にとって意味をもつものとしても記述されるのであり、この意味で生世界は人間にとっての世界である (Gurwitsch 1957: 371)。生世界は自然的世界であると同時に、意味連関から成る文化的世界でもある (Schütz 1962: 133=1983: 215)。ただし、シュッツの「生世界」は「日常生活世界」とは異なる概念である (cf. 那須 1993)。日常生活世界は、私たちが経験する多元的な意味領域のうちの1つを指す概念であり、そこにおいて私たちは実践的関心に導かれて行為する。生世界の内側にある日常生活世界以外の意味領域としてシュッツが挙げているのは、例えば科学や宗教である。

さてそれでは、シュッツは生を——生の哲学から離脱し——世界内に位置づけ直すことで、具体的には生にどのような新たな規定を付与したのだろうか。本稿はこれを間主観性・歴史性・パースペクティヴ性という3点に沿って整理できると考える。この3つの性質は、いずれも「生の形式」および『意味構築』では十分に検討されていない。歴史性については基本的には「経験の蓄積」および「社会的世界の分節化の一部をなす先行世界」という観点でのみ触れられている (Schütz 1932: 81-3, 236-45=2006: 124-7, 310-22)。パースペクティヴ性についても、他者理解論において「統握のパースペクティヴ」という表現が登場するものの生世界の不透明性や地平としての類型化といった観点は登場していない (Schütz 1932: 116=2006: 168)。間主観的世界は『意味構築』第4章前半の主題であるものの、対面的状況において自己と他者にとっての対象の間主観的同一性がいかにして確証されるかが問われるのみであり、その科学論的意義までは考察されていない (Schütz 1932: 190=2006: 256)。生世界概念の導入以後に顕著な展開をみせたこの3点に注目することで、世界に内属する生というシュッツの新たな思考様式を具体的に把握することができる。

## 4.2 間主観性

何よりもまず、生を世界に内属するものとして扱うことで同時に間主観性を所与として扱うことになる、という点が重要である。ここでの間主観性とは、第一義的には、「主観としての他者が存在し、私と同等の権利を持ってこの世界を経験している」という意味合いである。他者の存在は論証されるべきことがらではない。なぜなら私の生にとっても他者の生にとっても、この世界は生まれる前から存在し死んだ後も存続する世界であって、私も他者も自らの生を超越する世界の内に住まう存在にほかならないからである。この意味でシュッツは、「間主観性は生世界の所与である」 (Schütz 1966: 82=1998: 136) と述べている。

間主観性については、晩年のシュッツがフッサールの他者構成論を否定する論文を書き終えた際にアロン・グールヴィッチ宛に書いた手紙の結びの文章が、印象的

な例となっている。

超越論的自我は存在せず、自我論理的 (egologisch) でない主題の場だけが存在するのですから、君は僕を決して構成することは出来ません！僕は全くの内世界的な間主観性において君と結びついていれば満足です。……間主観的な親愛をこめて、君の原初のかつ自我論理的なアルフレッドより (Schütz and Gurwitsch 1985: 402=1996: 425)

この文章には、間主観性に関するシュッツの考え方の2つの核心部分が凝縮されて述べられている。第1に、私と相手は互いの存在を構成することが決して出来ず、互いに結びついていれば十分であるということ。第2に、「原初のかつ自我論理的」という表現に含意されているように、間主観性を前提にするからといって自他の差異が消去されることは決してないということ。私たちの住まう生世界は、いわば原理的に「多中心的」な構造をもっているものであり、世界内のある対象に関して他者が私と同じようにみているという保証は、ここには必ずしも含意されていない。そうした問題はシュッツにおいては「対象の間主観的同一性の問題」として規定されている (Schütz and Gurwitsch 1985: 40-5=1996: 69-75)。

#### 4.3 歴 史 性

第2に、世界に内属する生は歴史性をもつ。もっといえば、歴史性を欠いてはいかなる経験も成り立つことがない。フッサールはそのつどの経験においてそれに先立つ先行知識が常に必要になると説明している。「目のまえの事物をいまはじめてとらえ……以前にはいまの知識以上のことはなにも『しる』ところがなかった、というような経験はどうかんがえても存在しない」のであり、事物の経験においては「おのずから必然的に、まさにこの事物にかんする知識や付随知識をともなっている」(Husserl [1939]1964=1999: 23-4)。ここでいう「必然的に伴う付随知識」は、現象学では地平と呼ばれる。地平は「つねにすでに」という仕方では経験に伴っており、この意味で地平は歴史的存在である。シュッツ自身の言葉を借りれば、経験される対象は「はじめから親近性と既知性の地平の内にある」(Schütz 1962: 7=1983: 54)。特に日常生活世界を生きる人間がおかれている状況は、シュッツにおいては、「以前の経験すべてが、利用可能な知識集積という習慣的な所有物の内に組織化される形で沈殿したもの」(Schütz 1962: 9=1983: 56-7)としての生活史的状況 (biographical situation) と呼ばれる。

だが、世界に内属する生の歴史性をなすものは、ある個人の生活史だけではない。生世界が間主観的なものである以上、他者が生み出したものごとく歴史に含まれる。このことをシュッツは先行世界 (Vorwelt) の地平性として論じている。今を生きる私からみて、過去は先行世界として現れる。先行世界は素朴に直截的に生きている人の視界にはっきり入ってくるわけではないものの、「先行世界は背景として、



つまり地平としてつねに存在している」(Schütz 2003: 97). 先行世界の人間に対して影響を与えることができないという点で彼らの思考や活動は原理的に現在の私から隔絶している一方、彼らが思考し活動したことは、私の社会的日常の存在の中に入り込んでいる (Schütz 2003: 97). したがって、生世界論における先行世界は個別の生を超越する歴史的な地平をなすものとして扱われているといえる。確かに同様の議論は、社会的世界の同心円的分節化と歴史記述を主要論点とする『意味構築』の先行世界論においても、部分的には確認することができる (Schütz 1932: 245=2006: 321). しかし生世界概念の導入によって、超越的な地平としての歴史と先行世界という規定がより明確にされている。

#### 4.4 パースペクティブ性

第三に、シュッツは私たちの経験はつねにパースペクティブ的であり、私たちの経験にはつねに不透明性が含まれている、と考えている。生世界の経験の最も基本的なパースペクティブ性は空間的位置であるが、シュッツの議論においては、生世界のパースペクティブ性は単なる空間的位置だけでなく、知識の問題と関係づけられている。すなわち、日常的行為者のパースペクティブは類型化の下で成り立っている。類型化は、人間が自発的に選び取って対象に当てはめるような解釈図式のことではない。類型化は対象を経験し理解するのに先立って、「つねにすでに」機能している地平である。地平としての類型化は、予料(可能性の先取り)として働く (Schütz 1966: 94=1998: 159).

加えて、類型化というパースペクティブ性自体が状況依存的に成り立つ現象である。シュッツの考えでは「類型それ自体といったものは存在しておらず、存在しているのはただ、個々の問題と結びついた類型だけである」(Schütz 1970: 63=1996: 105). 経験の地平として機能する類型は、そのつどの行為の状況に応じて選定される。この選定原理をシュッツはレリヴァンスと呼んでいる。

さらに、生世界は「基本的に不透明」(Schütz and Luckmann 2003=2015: 294)である。シュッツによれば生世界の不透明性は、「完全に硬直化している世界、あるいは知識習得の最終決定的な完結というのは、通常の間人にとってはあり得ない」(Schütz and Luckmann 2003=2015: 332)という知識習得過程の構造に由来する。世界はつねに開かれており、私たちは刻一刻と変化する世界の中でつねに新しい知識を習得し続けるのである。

類型化的知識は、不断の過程の中にあるという意味で歴史性を帯びている。さらに類型化は、人間が独力で身につけていくものというより、他者との関わりの中で身につけていくものである。その意味で多くの類型化的知識は間主観性を前提とする。

## 5 科学する生

前節では、生世界論の導入に伴いシュッツが生を世界に内属するものとして捉えるようになったことを示した。こうした規定に従い、シュッツは科学する生もまた世界に内属するものとして扱おうとする。科学する生にとって生世界はつねにすでに与えられている地平であって、生世界からの脱出はありえないのである。フッサール同様、シュッツにとっても「あらゆる学は人間の諸活動、つまり共働する科学者たちの諸活動から成る全体」(Schutz 1962: 120=1983: 201)である。極端な言い方をすれば、「科学は集団的な文化的達成であり、原理的にはその他の文化的諸活動とそれほど異なるものではない」(Gurwitsch 1957: 373)のである。それゆえ、世界に内属する生の特徴である「間主観性」「歴史性」「パースペクティヴ性」という性質が、科学する生にもあてはまる。シュッツは生世界概念の導入によってようやく、先述の第2の問題平面に取り組むことが可能になったのである。

### 5.1 間主観性と科学

間主観性は日常的行為者のみならず科学者にとっても重要である。確かにシュッツは多元的現実論の一節において、「理論化する孤独な自己」に言及している(Schutz 1962: 253=1985: 67)。しかしこれはあくまでも1人の科学者が思考に沈潜する間にとっている認知様式の話であって、科学的活動が他者との共同作業であるということをシュッツは見逃してはいない<sup>8)</sup>。シュッツは社会科学の学的性質を説明する中で、「科学者Aの観察による発見およびその人によって引き出された結論を、科学者Bが点検し検証する手順」(Schutz 1962: 53=1983: 116)を記述する必要性に言及している。これは、シュッツのこの記述を言い換えたゲールヴィッチの表現を借りれば、「内部的科学的操作の検証過程は社会的行為である」(Schütz and Gurwitsch 1985: 328=1996: 350)という洞察である。

ここで注意すべきは、科学する生の間主観性は実証的な経験科学の領域にのみ本質的なのではない、という点である。実証的な経験科学に比べて「孤独」に仕事をしているとみられがちな哲学者もまた、ここでは一個の科学(学問)する生として、生世界の内部におかれた存在とみられている。したがって、哲学者の探究においても、「真理は生世界という開かれた可能性の領域における間主観的な修正や根拠づけを必要とする」(Schütz and Gurwitsch 1985: 204-5=1996: 229)ということになる。科学者の間主観性を前提とするとき、「科学は再び生の世界に含み込まれる」のであり、それによって「共に哲学することという奇跡」が可能になっている(Schutz 1962: 259=1985: 73)。

### 5.2 歴史性と科学——科学的状況とシンボル

科学が生世界の間主観的過程である以上、科学はつねに歴史的な地平を伴う。シ

ユッツの論じる科学の歴史性は、フッサールの哲学観におけるような「理性の自己発展のテロス」という理念ではなく、科学知の歴史的形成のメカニズムである。

日常生活世界の人間が各々の生活史的状況におかれているのに対し、科学する生は「科学的状況」におかれている。「科学的観察者の私心のない態度をとろうと決意することによって……社会的世界における自らの生活史的状況から自分自身を引き離す」(Schutz 1962: 37=1983: 90) ことで、科学する生は科学的状況に参入する。科学的状況は生活史的状況とは異なり理論的関心に従って形成されているため、科学者は日常生活者によって自明視されているものごとを疑問に付することができる(Schutz 1962: 37=1983: 90)。

科学的状況は科学知の組織化に関する命題である。すなわち、科学の世界は、1人の科学者を超越する「前もって組織化された知識の領野」として、あらかじめ与えられているのである(Schutz 1962: 37-8=1983: 90-1)。そして科学知の集積は、科学者たちの間主観的過程を通じて歴史的に産出されたものである。この点で、前節で述べた「生に対する世界の超越と世界に内属する生」という論理構造がここでも採られている。

しかし、科学の歴史性に関して重要な論点がもう1つ存在する。それは、科学(学問)を行うための媒体が歴史的産物であるという点である。このことをシュッツは「シンボル」という概念で説明している。後期の論文「シンボル・現実・社会」におけるシンボル概念は、間接呈示(appresentation)の指示関係を作り出すものの1つとして扱われている。一般に間接呈示(付帯現前化とも訳される)とは、何かを経験するときに同時に別の何かを経験することを指す。シンボルは、「ペアのうちの間接呈示する側は私たちの日常生活の現実の内側にある客体・事実・事象であり、間接呈示される側は私たちの日常生活の経験を超越する観念を指すような、高次の間接呈示的指示関係」(Schutz 1962: 331=1985: 166-7)として定義される。つまり、シンボルは見たり触れたりすることのできない観念的な存在の経験を可能にする媒体なのである。科学や哲学は西洋文化が生み出したシンボル体系である(Schutz 1962: 332=1985: 168)。科学や哲学のシンボル体系は、日常生活世界を超越した「高階の」意味領域を形成するけれども、シンボルを媒体としてそうした意味領域を現出させる行為はつねに世界に内属する生において遂行されている。

以上から、科学の歴史性をめぐってシュッツは2つの側面を想定しているといえる。1つは世界に内属する生の文化的実践としての科学であり、その媒体たるシンボルは歴史的産物として存在している。だがもう1つの側面として、実践的行為の組織化とは区別される科学知の歴史的組織化を想定している。科学は各々の行為者が実践的関心に導かれて日常生活を送る場合とは異なり、理論的関心に導かれて成り立っている。世界に内属しつつ世界を超越するという役割を担う科学の二重性が、こうした議論の構成を余儀なくしている。

### 5.3 パースペクティブ性と科学

生活史的状况におかれた日常の行為者は特定の「いまここ」に位置づけられているのに対し、科学的状况におかれた科学者はそのような「いまここ」をもたない (Schutz 1962: 39=1983: 92) というシュッツの対比的説明は、一見すると日常知のパースペクティブ性と科学知の脱パースペクティブ性という対比にみえる。しかし、科学する生が生活史的状况の中の特定の「いまここ」から組織化されているわけではないからといって、科学知が生世界のパースペクティブ性から脱出したり世界の不透明性を排除できるようになるわけではない。むしろ科学知に特有のパースペクティブ性こそが問題となる。日常知にとってであれ科学知にとってであれ事実とはつねに解釈された事実である、と彼が述べる時、彼が念頭にしているのはこうした問題である (Schutz 1962: 5=1983: 51; 那須 1993: 258)。

シュッツが生前公刊した論文の中で科学知のパースペクティブ性について論じたとは言い難い。しかしシュッツは草稿や書簡の中で、探究のレリヴァンス構造の検討を通じてこの問題への接近を試みている。理論的な生においても実践的な生においても、「問題を適切な仕方ですべて解決するために必要とされる探究の深さ」は、レリヴァンスによって規定されている (Schutz 1970: 103=1996: 155)。そして、シュッツがエリック・フェーゲリンに対してレリヴァンス理論の意義を説明する中で述べているように、いかなる探究も「与えられた答えが満足いくものと思われ、それゆえ立てられた問題が解かれたと思われる」ための条件が設定されている (Schütz and Voegelin 2004=2011: 157)。この条件を規定するのがそのつどのレリヴァンスである。科学を遂行する理論的な生はそのつど取り組んでいる問題に応じたレリヴァンスに規定されており、そのレリヴァンスを超える範囲の問題に対しては解答を与えることができない。それゆえ「立てられた問題が解かれたと思われる」地点で、探究活動は (少なくともいったんは) 打ち切られる<sup>9)</sup>。科学のパースペクティブ性とは、探究活動が特定のレリヴァンスに自己限定することで初めて成り立つという性質である。

## 6 おわりに

ここに至り、私たちは生の哲学の影響下でなされた「両極対立」の議論との違いをはっきり見て取ることができる。本稿全体の議論を要約しつつ、これを提示しよう。「主観の意味と客観の意味の両極対立」の議論において、生は生成ないし流動性として特徴づけられ、科学知は生を固定化して把握するものとみられていた。したがって生と知は対極をなす概念であり、社会科学は生との差分において特徴づけられていた。しかしそのアプローチは、「科学する生」の特徴を積極的に規定することができないという点に困難があった。これに対し、生世界概念の導入によって、日常を生きる人間も科学に従事する人間も、世界に内属する生として捉え直された。私を超越し一切の活動の普遍的基盤をなす世界の中では、生は間主観性・歴史性・

パースペクティヴ性を伴う。これに基づき、「科学する生」は科学の間主観的構造、科学的状況と科学の媒体としてのシンボルの歴史的成立、レリヴァンスによる科学的探究のパースペクティヴ性という3点によって特徴づけられた。

本稿の問いは、「科学と生の連関に関して、シュッツはいかなる契機の下で生世界概念を導入し、それによってシュッツの論理はどのように変化したのか」というものであった。これに対する答えは、科学する生を捉えるために生という概念自体を生世界の哲学の影響圏から脱却する形で捉え直し、これを「世界への内属」という形で規定し直した、とまとめられる。「生」という語に「世界」という語を付加することは、シュッツの思考の展開過程において決定的な意義をもっていたのである。

このように科学する生の世界内属性を主題化したシュッツであるが、科学を世界内の他の社会文化的活動と同一視しているわけではないことも本稿で明らかになった。したがって、科学（学問）する生が世界に内属するというシュッツの着想は、「科学する生はいかにして世界に内属すると同時に世界を超越するのか」という新たな問いに直面する。

社会科学にとってこの問題は、マックス・ウェーバー以来の認識論的根本問題である。自然科学と社会科学（文化科学）の相違点、価値関係と価値自由の問題、解釈学的循環の問題などは、いずれも「社会学者はいかにして世界に内属すると同時に世界を超越するのか」という問題の系として理解できる<sup>10)</sup>。また、社会科学認識論は個別領域（とりわけ社会学）の方法論や研究理念と分かち難く結びついているがゆえに、これを哲学の問題として社会科学の関心から追放するというわけにもいかない。認識論と方法論は研究実践の道具を提供する単なる補助学ではなく、科学の自己理解をなすものである（Habermas 1970=1991: 92）。

シュッツの視座から上記の認識論的問題に1つの答えを与えることが、残された課題である。生世界に立ち戻ることのみを強調し生世界を個別の研究対象領域として扱う限り、この課題が解決されることはない。さしあたり方針を述べるならば、シュッツの立論の骨子は、科学（Wissenschaft）の認識の構造を、知ること（Wissen）に差し戻して考えることにある。社会学者にとって社会的世界は、その一員としてあらかじめ知っている世界であると同時に、学問的に問うことのできる対象でもある。シュッツの生世界論の特長は、知ることと問うことの構造から社会科学の意味を考察することができるという点にある。

社会科学という営みの基礎を真に理解するためには、科学的とされる方法に頼るだけでなく、社会科学という形式の知が生世界の中でもちうる意味を、そして知るといふ行為の意味を、問い続けねばならない。そのための端緒を、私たちはシュッツに見出しうるのである。

【付記】 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（17J07319）の成果の一部である。

## [注]

- 1) この言葉は一般的に「生活世界」と訳されるが、シュッツにおける「生」の変化を主題とする本稿においては「生世界」が適訳である。訳語の選定に関しては浜渦辰二（1991: 71）も参照。またシュッツはゲールヴィッチに対する書簡の中で、Lebensweltの仏訳語として *le monde vécu* を提案している（Schütz and Gurwitsch 1985: 352=1996: 374）。これはモーリス・メルロ＝ポンティがフッサールの生世界概念をこのように訳していることに由来するとみられる（Merleau-Ponty 1945=1982: 812）。
- 2) それどころかシュッツは、「正統な」フッサール解釈には関心のない「異端」（Schütz and Gurwitsch 1985: 40, 44 =1996: 70, 73）を自認してさえいた。
- 3) したがって本稿はこの変化を、1939年のアメリカ亡命以後のプラグマティズム受容とは独立の事態として考えている。
- 4) 少なくともフッサールにおいては、生世界は後期の主題であって、超越論的現象学を宣言した『イデーン I』の時はモチーフが変化している。これについては新田義弘（1992: 77-126）を参照。
- 5) シュッツの社会科学の基礎づけというプロジェクトは狭く理解されることがある。例えば西原和久は、後期において基礎づけから生活世界の構造の探求へと比重が変化したとみている（西原 1991: 308）。しかし2つの問題平面の連関において「基礎づけ」を理解すれば、これを西原の指摘を包含する形で見通すことができる。
- 6) 以下の議論は高艸（2017）に依拠している。
- 7) 世界概念という着眼点を本稿は小関彩子（2001）から得た。小関によると、メルロ＝ポンティはベルクソンの自由行為論を、「世界」概念の不在を批判することで刷新しようとしている。
- 8) 「理論的な思惟はいかにして伝達されるのか」という「伝達のパラドックス」問題に関しては、やや記述が込み入っているものの、問題設定自体が偽問題として退けられているとみるべきである（矢田部 1998: 159）。
- 9) あるいは、他の問題がレリヴァントになることで、問題が解決される前に探究活動が中断される可能性もある（cf. Schütz and Luckmann 2003=2015: 266-81）。
- 10) 例えばウェーバーは、研究者が価値理念を自発的に選択しそれに基づいて「知るに値する」対象を構成するということが社会科学の前提であると説いている（Weber 1904=1998）。ユルゲン・ハーバーマスは、学問を遂行する人間が前提とせざるをえない先行理解の構造に関する哲学的解釈学の議論を踏まえつつ、分析的－経験的手続きと解釈学的手続きの統合に基づいて行使される社会科学の「反省の力」こそが科学の超越性の根拠であると考えている（Habermas 1970=1991）。

## [文献]

- Bergson, H., [1889]1908, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, sixième édition, Paris: Félix Alcan. (竹内信夫訳, 2010, 『意識に直接与えられているものについての試論』白水社.)
- Gurwitsch, A., 1957, "The Last Work of Edmund Husserl," *Philosophy and Phenomenological Research*, 17(3): 370-98.
- Habermas, J., 1970, *Zur Logik der Sozialwissenschaften: Materialien*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (清水多吉ほか訳, 1991, 『社会科学の論理によせて』国文社.)
- 浜日出夫, 1982, 「ビグマリオンとメドゥーサ——A・シュッツの『現象学的社会学』の位置」『社会学評論』33(1): 64-77.

- 浜渦辰二, 1991, 「フッサールにおける生世界——厳密学としての哲学という見果てぬ夢」『文化と哲学』9: 55-74.
- Husserl, E., 1954, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, Haag: Martinus Nijhoff. (細谷恒夫・木田元訳, 1995, 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社.)
- , [1939]1964, *Erfahrung und Urteil: Untersuchungen zur Genealogie der Logik*, 3. unveränderte Aufl., Hamburg: Claassen Verlag. (長谷川宏訳, 1999, 『経験と判断 (新装版)』河出書房新社.)
- 丸山高司, 1987, 「社会科学における『科学的世界』と『生活世界』——シュッツをめぐる」『現象学年報』3: 49-63.
- Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard. (中島盛夫訳, 1982, 『知覚の現象学』法政大学出版局.)
- 森元孝, 1995, 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会科学の自由主義的転換の構想とその時代』新評論.
- 那須壽, 1993, 「生活世界と社会科学」新田義弘ほか編『岩波講座現代思想 6 現象学運動』岩波書店, 241-70.
- , 1997, 『現象学的社会学への道——開かれた地平を求めて』恒星社厚生閣.
- 西原和久, 1991, 「複眼の社会理論: 現象学と社会学の間——シュッツ現象学的社会学の再構築に向けて」西原和久編『現象学的社会学の展開——A・シュッツ継承へ向けて』青土社, 298-328.
- 新田義弘, 1992, 『現象学とは何か——フッサールの後期思想を中心として』講談社.
- 小関彩子, 2001, 「世界の内における人間存在の自由——フランス現象学から見たベルクソン」『理想』667: 92-103.
- Schnädelbach, H., 1983, *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (舟山俊明ほか訳, 2009, 『ドイツ哲学史 1831-1933』法政大学出版局.)
- Schütz, A., 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Verlag von Julius Springer. (=2006, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成——理解社会学入門 (改訳版)』木鐸社.)
- , 2003, *Theorie der Lebenswelt 1: Die pragmatische Schichtung der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- , 2006, *Sinn und Zeit: Frühe Wiener Arbeiten und Entwürfe*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- , 2009, *Philosophisch-phänomenologische Schriften 1: Zur Kritik der Phänomenologie Edmund Husserls*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- Schutz, A., 1962, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, The Hague: Martinus Nijhoff. (渡部光・那須壽・西原和久訳, 1983/85, 『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]・[II]』マルジュ社.)
- , 1966, *Collected Papers III: Studies in Phenomenological Philosophy*, The Hague: Martinus Nijhoff. (渡部光・那須壽・西原和久訳, 1998, 『アルフレッド・シュッツ著作集第4巻 現象学的哲学の研究』マルジュ社.)
- , 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, New Haven and London: Yale University Press. (那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳, 1996, 『生活世界の構成——レリヴァンスの現象学』マルジュ社.)

- Schütz, A. and A. Gurwitsch, 1985, *Alfred Schütz, Aron Gurwitsch: Briefwechsel, 1939-1959*, München: Wilhelm Fink Verlag. (佐藤嘉一訳, 1996, 『亡命の哲学者たち——アルフレッド・シュッツ / アロン・ゲールヴィッチ往復書簡 1939-1959』木鐸社.)
- Schütz, A. and E. Voegelin, 2004, *Eine Freundschaft, die ein Leben ausgehalten hat: Briefwechsel 1938-1959*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (W. Petropoulos, trans., 2011, *A Friendship That Lasted a Life Time: The Correspondence Between Alfred Schütz and Eric Voegelin*, Columbia: University of Missouri Press.)
- Schütz, A. and T. Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (那須壽監訳, 2015, 『生活世界の構造』筑摩書房.)
- Srubar, I., 1988, *Kosmion: Die Genese der pragmatischen Lebenswelttheorie von Alfred Schütz und ihr anthropologischer Hintergrund*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- 高艸賢, 2017, 「シュッツの社会科学基礎論における生の諸相——体験次元と意味次元の統一としての主観的意味」『現代社会学理論研究』11: 55-67.
- Weber, M., 1904, "Die 'Objektivität' sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* Bd.19, 22-87. (富永祐治・立野保男訳, 折原浩補訳, 1998, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.)
- 矢田部圭介, 1998, 「意味とワーキング——科学と多元的現実の再考」西原和久・張江洋直・井出裕久・佐野正彦編『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房, 144-66.
- 吉澤夏子, 2002, 『世界の儂さの社会学——シュッツからルーマンへ』勁草書房.  
(原稿受付 2018.3.18 掲載決定 2019.4.5)



**Alfred Schutz's Foundation for the Social Sciences and  
the Motivation and Significance of His Introduction of  
the Concept of the Life-World:  
From Becoming to Inherence in the World**

*TAKAKUSA, Ken*  
*The University of Tokyo*  
nm7.tk.shogi@gmail.com

Known as a phenomenologist of the life-world, Alfred Schutz offered a clue to reflecting on the meaning of the social sciences in addition to his discovery of the “life-world” as a research field of sociology. It was only during the development of his thought that he introduced the concept of the life-world. This paper examines the motivation for Schutz’s introduction of the concept of the life-world and how his theory changed as a result.

Schutz’s works, written in the 1920s and at the beginning of the 1930s, inherited basic concepts such as “life and becoming” from the philosophy of life (*Lebensphilosophie*). His works also adopted a polar opposition model that placed life and becoming on one side and science as a logical or conceptual activity on the other. However, in doing so, science was characterized as being disconnected from life itself. This viewpoint resulted in some difficulty. This is because although science is a part of human life, the polar opposition model precludes a scientific life. In reexamining the concept of life, Schutz introduced the concept of the life-world, and in this way advocated the inherence of life in the world, regardless of whether it referred to ordinary people or those engaged in scientific activity. He argued that the world transcends the ego and forms the universal foundation of all activities. Consequently, Schutz ascribed three attributes to the concept of life: intersubjectivity, historicity, and perspectivity. Based on these attributes, Schutz characterized scientific life in the world as the (1) intersubjective structure of science, (2) historical formation of scientific situations and symbols as a medium of science, and (3) the perspective of scientific activity governed by “relevance structures”.

Key words: Alfred Schutz, foundation for the social sciences, scientific life

(Received Mar. 18, 2018 / Accepted Apr. 5, 2019)